

小学校低・中学年のスキー授業の学習指導に関する研究

スポーツ文化研究領域

5009A069-1 東村 八千代

研究指導教員：吉永 武史 専任講師

【問題の所在】

現在、小学校学習指導要領においてスキーは「自然とのかかわりの深い雪遊びスキー、スケート、水辺活動などの指導については、地域や学校の実態に応じて積極的に行うことに留意する」(文部科学省, 2008, p.101)とあり、日本の積雪の多い地域では冬季の体育でスキー授業が行われている。地域の環境や自然の理解、生涯スポーツへつなげるためにも、学校体育でのスキー授業は重要であると考えられる。生涯スポーツとしてのスキーの基礎を作るこれからの学校体育のスキー授業は、楽しさを見つけることが出来るようになるために、目標を見つける力、課題を解決する力をつける系統的な学習段階に応じた学習内容を検討する必要がある。

【研究の目的】

そこで本研究は、スキーの基礎を作り(パフォーマンスを保証し)、自ら楽しさを見つけることが出来る(生涯スポーツとしての基礎を学べる)を前提とした、スキーを専門としない教師でも指導が可能な授業プログラムを作成することを目的とした。

【各章の概要】

<第1章>

第1章では、学校体育におけるスキー授業の実態と課題を明らかにするために、朝日新聞ならびに読売新聞に掲載されたスキー授業に関する調査結果と、北海道における小学校のスキー授業について検討を行っている三浦(1986, 1987a, 1987b, 1989)の論文を中心に分析した。次に、スキー授業における課題を指導者に関する課題、学習環境に関する課題、指導方法に関する課題、評価に関する課題の4つに分けて、具体的な事例にも

とづきながら検討した。そして学校体育のスキー授業の意義とあり方について検討した。

近年学校体育のスキー授業が減少傾向にある。その要因として教師のスキー離れや経済的に負担がかかること、あるいは天候に左右されることから授業のやりくりが難しいことなどが挙げられていた。指導者の問題としては、1人の教師が数十名一緒に指導するだけではいけない指導形態が指摘されていた。また、スキー授業の指導には専門的知識が必要であることなどが挙げられていた。

体育の学習環境とは一般的に体育館や校庭などであるが、スキー授業の学習環境は、雪のある屋外に限られている。しかし、スキー授業は近くに特別なスキー場などがなくても近くの自然をうまく活用することによってスキー授業を行うことができる。指導者はスキー授業を取り扱おうとする時、学習環境については柔軟にとらえることが重要で、それによって実施が可能となる。

また、スキー授業で児童が実際に滑っている時間は極めて短い。安全面からも一人一人間を空けて滑走したりする。したがって、スキー授業ではいかに運動学習場面を多くすることができるかが、よりよいスキー授業を実施するためのポイントと言える。

スキーの評価も、目標を明確にすることでそれに対してしっかりと評価をおこなうことができる。しかしそのとき、従来のスキー指導にあったような型を重視した指導と評価にならないよう注意するべきである。

<第2章>

第2章では、スキー技術ならびに指導体系に関する理論的分析を試みた。全日本スキー連盟の指導書にみるスキー技術ならびに指導体系について述べ、次に児童期におけるスキー技術ならびに

指導体系から、スキー技術の系統的つながりと学習指導過程を分析した。

全日本スキー連盟では、スキーに必要な運動技能の区分を①導入技術、②平地での移動技術、③傾斜地での移動技術の3つに分け、スキーの学習で最も多くの時間が割かれる③傾斜地での移動技術はさらに登る技術、滑り降りる技術、制動技術、実践的なターンに分けられている。これまでの技術指導は、手段である技術習得が目的となりスキーヤーから楽しさを奪う要因となっていたことから、一人一人の個性が尊重された個別的な指導の展開や、一方楽しさを発展させるための学習過程として、「現在持っている技能で工夫しながらのスキー学習」から「創意工夫によって新たに身につけた力での学習」へと進めるスパイラル学習が提案されている。

スキーの技術は基本の姿勢(直滑降姿勢、ブルーク姿勢、斜滑降姿勢)から回転技術(ブルークボゲン、シュテムターン、パラレルターン)のような流れで学習を行うことで、無理なく学習を進めることができる。子どもの指導では、単元の前半では、雪遊びをしたり、スキー用具の取り扱い、滑る感覚に慣れることをねらいとするような学習指導を位置づけ、スキーの操作や取扱いに慣れてきた単元の後半では、友達同士で競争をしたり、スキーを滑る感覚を楽しませるようにすることがポイントである。

<第3章>

第3章では、スキー授業の学習指導プログラムの実証的検討を行うために、実験校の地域的特性とスキー授業の実施状況を示し、実験校が小規模校であったため小規模校の体育の実態について触れ、それらを踏まえて、小学校低・中学年対象のスキー授業の学習指導プログラムを作成した。異学年合同で授業を行うため、技能レベル別の班(上位群・中位群・下位群)ごとの学習を中心に行った。検証授業は2010(平成22)年1月18日から2010(平成22)年2月12日にかけて、青森県鱒ヶ沢町A小学校(小規模校)の1年生(女子5名)、2年生(女子7名)、3年生(男子4名、

女子4名)の3学年を対象に10時間の合同授業(1時間目は1年生のみ)を行った。授業を担当したのは、1年生担任の女性教師、2・3年生担任の女性教師の計2名を中心に、月・火曜日の授業(3・4・5・6・8時間目)は非常勤の女性教師が加わり計3名であった。3名の教師はいずれもスキー指導の経験はあるが、スキーは専門ではなかった。検証授業の結果と考察は、主観的評価とパフォーマンス評価によって検証した。主観的評価は形成的授業評価を毎時間実施し得点化した。パフォーマンス評価は基準を作成し得点を出した。

その結果、形成的授業評価は全体で「総合評価」は常に「4」と高く、今回実施したスキー授業の学習指導プログラムが児童に受け入れられていたことが確認された。パフォーマンス評価は全体的にみると、すべての群でパフォーマンスに伸びがみられた。初めて学校のスキー授業を体験する1年生は全員ターンすることが出来るようになった。上位群に関しては、ほとんどの児童が中斜面でのブルークターンができるようになった。

学習指導の修正ポイントは、難しい技術であっても、みんなで取り組むと楽しめるという効果を活かして、スケータングリレーと探検ゲームを位置づけた。児童の「意欲・関心」を維持しながら、スキーのパフォーマンスを向上させていくためには、児童が夢中になって取り組めるような教材が求められるのではないかと考えた。

<結章>

結論として、今回のスキーの学習指導プログラムは児童に十分受け入れられたことが確認された。また、学校の校庭や学校敷地内を利用したスキー授業でも、十分に技能を高めることが可能であった。本研究の実験校は小規模校だったため、比較対象、サンプル数が少なかった。今回のスキー授業の修正プログラムの実証的検討を行い、さらには、児童の「意欲・関心」を維持しながら、スキーのパフォーマンスを向上させていくための教材開発をすすめていくことが今後の展望となるだろう。